

## 琵琶湖・淀川水系におけるチャネルキャットフィッシュの捕獲状況

吉田 誠 (国立環境研究所 琵琶湖分室)

近年、外来魚の1種チャネルキャットフィッシュ *Ictalurus punctatus* (図1) の琵琶湖・淀川水系への侵入が確認され、琵琶湖下流の瀬田川および琵琶湖南湖で繰り返し捕獲が確認されている。2010年代に入って、京都府内の宇治川、大阪府内の淀川本流、奈良県内の布目ダム湖でも散発的な報告がみられはじめ、水系全域での本種の現状把握が急務である。

そこで本研究では、琵琶湖・淀川水系内での過去ならびに直近のアメリカナマズ捕獲情報を、下記の3通りの方法：(a) 研究・教育施設への来訪者や釣り大会の参加者を対象としたチラシ配布・ポスター掲示、(b) SNS を活用した情報募集、(c) 連携する他機関との情報共有、により収集した。集めた情報を地図上にプロットすることで、本種の分布の現状を整理し、今後の重点的なモニタリングが必要な水域について考察した。

上述した3通りの方法を通じて、市民・研究者13名からの情報提供により、2012–2019年の26件56個体分、滋賀水試からの情報共有により、2001–2019年の258個体分の目撃・捕獲情報が集まった。前者の26件についてその内訳は、捕獲情報22件、目撃情報1件、文献提供2件、標本提供1件となった。直近3年では、下記の6水域で本種の捕獲が確認された：(1) 琵琶湖の南湖全域および北湖の南端部、(2) 瀬田川全域、(3) 天ヶ瀬ダムより下流の宇治川、(4) 三川合流付近、(5) 淀川大堰より上流の淀川、(6) 布目ダム湖内およびダム下流の布目川。

いっぽう、本種の捕獲が確認できなかった水域は、南端部を除く琵琶湖北湖の大半、三川合流付近と布目川流域を除く木津川水系、および桂川水系の3水域であった。これら3水域それぞれの中でも、本種の捕獲された水域との境界付近では、分布拡大の兆候を早期に捉えるためにも、継続的な情報収集と定期的な採集調査を組み合わせた重点的なモニタリングが必要だと考えられる。



【図】今後の重点的なモニタリングが必要と想定された4水域(赤色の強調部)。図中の丸印はそれぞれ、2016年以前(白)および2017年以降(青：漁業者、赤：遊漁者等)の採捕記録(ただし「？」印は未同定の目撃記録)を表す。主要なダム・堰堤は、河川を横断する黒線で示した。